

UCLA

Collection of Creative Writing by Learners of Japanese

Title

The Collection of Creative Writing By Learners of Japanese リレー小説集 Volume Two

Permalink

<https://escholarship.org/uc/item/5vz3m7tv>

Publication Date

2024-02-28

Copyright Information

This work is made available under the terms of a Creative Commons Attribution-ShareAlike License, available at <https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/>

The Collection of Creative Writing
By Learners of Japanese

リレー小説集
Collection of Relay Essays



Volume Two

Edited by *Asako Hayashi Takakura*

The Collection of Creative Writing
By Learners of Japanese
リレー小説集
Riree Shosetsushuu
(Collection of Relay Essays)

Volume Two

リレー小説集 *Riree Shosetsushuu* Vol. Two is written by the students of Japanese 100B (Third year advanced readings in modern Japanese, winter 2023). This volume was compiled and edited by Asako Hayashi Takakura, the senior lecturer for the classes, and published by UCLA Library.

Cover photo “Tokyo Tower 2” by Asako Hayashi Takakura, Copyright 2023.

This volume is licensed under Creative Commons Attribution-ShareAlike 4.0 International. CC-BY-SA 4.0

First published February, 2024 (Vol.2)

Typeset in Palatino Linotype for English
in Hiragino Kaku Gothic for Japanese

The Collection of Creative Writing by Learners of Japanese is a series of selected works of short prose written by the students of Japanese language in the Department of Asian Languages & Cultures of the University of California, Los Angeles. The collection is curated by Richard C. Rudolph East Asian Library to promote students' knowledge production in the Japanese language.

Preface

This project aims to promote creative writing skills among Japanese language learners and provide them with opportunities to publish their work to benefit future learners. The project targets undergraduate students in their third and fourth years of Japanese language studies, taking courses designed to develop their reading skills to allow them to read a novel without external support. To this end, students were encouraged to participate in significant reading activities outside class. However, students indicated that they had hard time to find more attractive reading options other than textbooks they read for class assignments. This project seeks to address the gap by encouraging students to create their own fictional works. Working in groups of three or four, students wrote a fictional work together. The students in the third-year Japanese class learned onomatopoeia used in literature and Japanese superstitions as parts of course works. Their creative writing was inspired by the course materials and used various words that are not found in commercial Japanese language textbooks. They successfully differentiated writing styles and applied these to their creative writing. Upon completing these assignments, students were motivated to publish their own work for future students of the Japanese language, expressing hope that their works might encourage others to write in various genres to improve their language proficiency.

Asako Hayashi Takakura, Ed. D

Table of Contents

Title	Authors	Page
ネガティブの神様	Alan Andrade Garcia, Arman Durrani, Barrett Koontz, Li Zhouan	5
一緒にこの世に出てきて それぞれにこの世を去る	Jennifer Chen, Chen Zheng, Xu Shu L, Sylvia Zhang	10
SAO II: 好きなVチューバーに彼氏がで きたから死んで、使えないやつに転 生した?!	Ken Cheng, Jaden Joodi, Sydney Rood, Jade Sumpter	18
忘れない愛	Nicole Bordeaux, Toni Enriquez, Van Hofmaister, Sean Wang	25
禁断のお茶	Corinne Morris, Kayla Sasser, Mika Watanabe	33
最後の配達	Oh Haeh Lyn, Ashley Sun, Maya Swain, Steven Vo	38
猫神と砂の犬くん: ブレイド・オブ・グローリー	Saejah Barrack, Christopher De Leeuw, Christopher Galvez, Nixa Starr	43

ネガティブの神様

Alan Andrade Garcia

Arman Durrani

Barrett Koontz

Li Zhouan

「床に目立っている染みがまだ残っている。」

またか？本当に？そのシャワーは多分のろわれた。こわいね。実はそのシャワーの真ん中にウンコがあるんだ。

でも、なぜ？なぜそのウンコがいつもあるんだ？管理人はそのシャワーをせっかく掃除したばかりなのに。しかし、それが俺の目的だ。犯人を探さなくちゃいけない。

木曜日の午後八時半：

俺の寮は小さい場所なので、誰もがお互いを知ってる。だからその犯罪は本当に危ないんだけど、あいつは本当に大胆すぎるねー

「あああああああ！」

何？その声？女の人？隣のリサちゃん？女性のトイレに走ったけど、もう遅かった。リサちゃんはシャワー室にいるんだけど、泣いていた。あいつはもうそのシャワーにウンコを出したかもしれない。

「リサちゃん、無事かー」

「来ないで！来ないで！」

「でも、手伝いたいー」

「だからやめて！もういい！もう...いい…」

よく見えなかったけど、ドアの後ろにリサちゃんがたおれていた。

「リサちゃん。入る前にだれかを見た？なんか怪しいことがあった？」

返事がなかった。

「リサちゃん？」

少し心配だった。

「リサちゃん、今入るよ。」

まだ返事がなかった。ドアを開けた。

思ったとおりにシャワーの真中にウンコがあった。

そして、ゆかのそのウンコの隣でリサちゃんの体は少し震えていたが、三秒後 彼女の息が止まった。リサちゃんは…亡くなってしまった。

「シット…」

「ヤダヤダヤダ！！どうしよう！？どうしよう！？」

次の日

俺はついに起きた。大変だった。

「いやー、リサちゃんはまだシャワーにいるんだ。．．．めっちゃ臭いなー授業に行かないといけないけど。．．．まあ、授業が終わってからリサちゃんの体を動かそう」

～授業中～

「リサちゃんをどうしたらいいか分かんない。考えがやめられない。ヤベーなあ。まあ、安心のためにボバを飲みに行こうかな。」

花茶というボバ店に向かって歩いている。

店員さんは俺に挨拶した。

「あ、いらっしゃいませ！何を召し上がりますか。」

と言った。

「抹茶クレームブリュレプリン一つお願いします。」

店員「950円です。」

俺「はい、どうぞ。」

店員「ありがとうございました。そちらでお待ちください。」

俺はテーブルに座ってボバを待っていた。

俺の頭の中で考えている「あ、でっかいおならが出る気がする。ゆっくり出れば、静かに出るかもー」

ぷうううううう～

通りすがりの男が「もうううう！！誰かおならしちやって臭いねえ！！」と言った。

俺の頭の中で考えている「え！？大きい音が出ちゃって恥ずかしい。俺のボバを持って、走ろう！！！」

突然、走りながら、リサちゃんのような女の人をチラチラ見た。

「えっ、リサちゃんに似てんじゃない？」

考える時間がない。おかしいと思った俺はあの女が行った路地裏に入った。

路地裏の突き当たり

俺はこの路地裏の突き当たりにたどり着いた、

そこにはリサちゃんとそっくりの女性が立っている、まるでリサちゃんの双子みたい。

俺：「お前は誰？リサちゃんとどんな関係？」

女：「なんで、そんな質問するの？私はリサよ。」

俺：「嘘つくな！リサは俺の目の前で死んだはずだ！」

女：「あら、ばれてしまったね。それじゃ、真実を教えてあげるわ。．．私はネガティブの神様だわ。六百年前にある陰陽師に封印され、ずっと出られなかった。でも、2年前にあなたたちの寮が私の封印地の上に建てられた時、私のチャンスがきた。私は人間の怒りや恐怖や憎しみなどの感情から力を得られるから、この二年間ずっとシャワーの中にウンコを召喚し続けて、学生たちをびっくりさせた。そして、あのリサっていう女の子をびっくりさせた時、ついに封印を解くほどの力を集めた。封印から逃げて、あの子の体に取り憑いたわ」

俺：「なぜこんなことするんだ。お前は神様なら、早くリサちゃんを解放してくれ！」

ネガティブの神様：「冗談言わないでよ。私は600年ぶりの人間世界を楽しんでいるの。あの学校の生徒に感謝してるから、君に手を出すつもりはないわ。さあ、用事がないなら帰ってくれ、私は忙しいんだから」

俺：「そこまでだ。悪党！」

ネガティブの神様：「あら、面白い。お前、何者だ？」

俺の中から妙な力が湧いている気がした。間近のビルの窓を見つめて自分をじっと見た。目と口から激しい光が出てきた。自分の考えと行動をどんどん抑え難くなっていく。

俺：「やっとまた会えたのう。この声で話したら、わかるかのう。」

ネガティブの神様：「まさか！死んだはずなのに。なぜ生きているんだ、鴨あきら」

あきら：「てめえを封印してから、ずっとわかっていた、いつか開封されて生き返ることが。だが、あの封印はただの封印ではなかったんだ。てめえの力を奪う封印だった。」

ネガティブの神様：「私の力？じゃ、お前も悪霊になったわけ？それなら、さっさと自分を封印して。近代の大学の寮は恐ろしいほどネガティブな場所で、今の力は前より10倍も強い。私に勝てない者いない。」

あきら：「違う。悪霊ではない。不死身でもない。だが、何度死んでも、すぐに転生する。そして、余の力はてめえのとまた違う。確かに、近代にたくさんのネガティブな感情があるに違いない。だとしても、この世に、同じくらいのポジティブな感情もあるさ。余の能力は世界の嬉しさ、希望、愛などの感情から強くなることだ。ここでてめえを倒す！」

目に見えないほど早く攻め合った。

そして、一瞬で終わった。あきは床に倒れた。

ネガティブの神様：「おほほ！ね、あきら。転生してから、また会いましょうよ。もっと遊びたいからね。」

ネガティブの神様は左手から真っ黒の四本のトライデントを出して、倒れてるあきの腹に差し込んだ。

ネガティブの神様：「でも今は死ね！」

とんでもない力でトライデントを激しく捻じてあきの体を崩しながら、ひどい顔でニヤニヤしていた。

あきはネガティブの神様に大量の血をはきかけた。

あきら：「やっちゃまったのう。ごほ、てめえの負けだ。」あきの血は切れない赤い糸になって、血まみれのネガティブの神様を縛りつけた。

ネガティブの神様：「な、何これ。放しなさい！」

あきら：「これで両方とも封印される。一緒に延々に生きよう。もし自分を開封しようとしたら、てめえをまた封印しておく。今度こそ逃しはない。」

あきの傷は消えて、同時にリサの身体が力無く倒れた。そして、リサは目覚めて起きた。

リサ：「あきら！どうしたの？大丈夫？！」

あきは自分の意識を回復した。

あきら：「リサ、無事でよかった。一緒にタピオカでも飲もうか。」

一緒にこの世に出てきて
それぞれにこの世を去る

Jennifer Chen
Chen Zheng
Xu Shu L
Sylvia Zhang

今日は京子の10歳の誕生日です。でも、誰も特に気にしません。

京子には家族がいません。村で一人暮らしをして、お腹が空いたときに隣に食べ残しをもらって、寒い時に町の人が捨てたくたびれたコートを拾って、楽な人生と全然言えないけど、とにかく今まで生きてきました。

でも、京子は一人じゃないです。一人じゃないからこそ、どんな厳しい生活にも我慢できます。

京子のたった一人の友達ハナと呼ばれる猫ちゃんです。

ハナちゃんは、毎週の火曜日に、必ず京子の家にプレゼントを持っていきます。でも、今日は違います。ハナちゃんは、何も持っていないくて、ただ、ニャーニャーと京子を呼び出してから、彼女を山奥に連れて行きます。

山奥には10歳の若い木があります。今日はこの木の誕生日です。

「ハナちゃん、私に見せたかったのはこの子なの？本当に綺麗な木だね。まさか、ここはハナちゃんの家？」

ハナちゃんは嬉しそうで、喉をゴロゴロならして、木にもたれて座ってる京子の腕の中で目を閉じて、すぐに寝込んでしまいました。

京子は片手でハナちゃんを撫でながら、頭を上げて、その木をじっと見ます。その木も、彼女をじっと見ます。

神様は世の中の不幸な子供たちを可愛がるので、友達の猫を一匹、守り神の木を一本、子供たちのそばに贈ります。彼らは神様の代わりに、幸福をあげるという伝説があります。それは、伝説ではないです。

葉の隙間から差し込んだ光、腕の中ですりすりするハナ、目を閉じたら耳に囁いた風、そして、その木が与える暖かさ。まるで、木に抱きしめられているようです。

これが、京子とあの木の最初の出会いです。

……

最初の出会い、か。

雷がゴロゴロ鳴って、稲妻のような刀がピカッと光っていた。瀕死の少女は泣かずに、地面を這い回ったが、灰の瞳は何も見えないようだ。

彼は刀を捨てた。地面を見つめている。

「俺は人生で二種類の人を殺さない……」

「おい！何を話しているんだ、兵士たちはすぐここに来る。急げ。」

「盲人と唾者だ。」

その男はそう言った。

兵士が来た。他の人は全員逃げた。しかし、彼は駆け込んでくる兵士を無視し、少女を背負って門へと向かった。

雨が降って、血が滴る。男は自分の傷があっても走り続けている。彼は、少女を背負って、村を飛び出し、はるばる山奥へと逃げ込んだ。

雲と霧が山奥と外の雨の世界を隔てた。月は夜空を照らしているが、彼に道を示すことはできない。背後の少女の息はどんどん弱くなっているが、彼には彼女を起こすことができない。

ここで終わったか？男はそう思った。

突然、遠くから奇妙な歌が聞こえてきた、「大きな夢から誰が最初に目覚め、十分満足だと知るか……」

彼はこぶしを握りしめたが、竹笠をかぶった長いひげを生やした老人が遠くからゆっくりと歩いているのを見た。でも、男は全然怖くないようだ。「ジジ。お前、仙人だろう。この娘を救え。」

その老人は大きな腹を撫でた。そして、男を見ていた。「それは、どのような態度か。わしは今、天界に行って、天后様の誕生日を祝うが、時間がない。」

「救えなければ、お前を殺す。」

「うわー、怖いな。わしは仙人だぞ。あえて仙人を殺すか。」

老人は酒を一口飲み、ゆっくり話している、「そうか、あなたは盲人と唾者以外は、誰でも殺す。仙人や悪鬼を恐れていないが、自分の戒を破ることを恐れているんだな。」

男は老人をじっと見つめた。彼は何で老人が自分の戒を知っているのか分からなかったが、酒の強い香りだけを嗅いだ。それから、めまいがして、世界が回っているようだった。

老人はため息をつき、酒をもう一口飲んだ。そして、彼は踊り、歌い始め、地面の葉と花卉が風に乗って、彼の周りに留まっていて、「蘭の香りに似たものを目指して、松の茂るがごとく栄える。川は流れて休むことなし、深みは澄んで物影映す……」

男は自分が飛んでいると感じた。彼は少女の青ざめた顔を見て、自分の冷たくなっている体を見て、天上の楼閣を見て、天の川を見た。理由は分からないが、彼は親しみを感じている。

彼は死んだ。体は、少女と一緒に土にうめられ、小さな塚になった。老人は口から酒を一口吐き、塚に落ち、小さな杉の木が徐々に芽を出した。

「五百年前、天界に仙草と杉の仙人がいた。杉の仙人は、仙草が好きで、天が定めた戒律を破って、仙草を盗んだ。怒った天后は、仙人と仙草を人界に送り、ふたりで生死輪廻を八十一回くりかえして苦しむ……」

「えっと、今回は何回目だったか……」

老人はひとりごとを言って、酒を飲んだ。それに、老人が手を振ると、彼の袖から白猫が飛び出した。

「彼らを覚えているか、ネコちゃん。昔の友達ですよ。」

白猫は前足をあげて、カンカンと鳴いた。

「うるさいな、ジジイ。ネコじゃねえ、ハナだ。早く消え失せろ。」

「ははははは、ひどいなあ！じゃ、ここはあなたに任せますね。」

老人はゲラゲラと笑い、足で地面を踏むと、白い雲が地面から立ち上がって、夜空と星に向かって飛んだ。

風が吹いている。京子は赤ちゃんのように、すやすやと寝ている。杉の枝はわずかに垂れ下がり、少女の髪に掛かっていた。

そうだ。今度の人生で最初の出会いだよね？

杉の木はそう思って、京子を見る。

あなたが元気なら、俺は自分の戒を破ることはない。

……

京子は毎週火曜日に、あの杉の木に戻って、ハナと一緒にその木の下に座って、食べたり、寝たり、勉強したりします。困ったときも、あの木に会いにいて、泣いたりします。嬉しい時も、あの木の枝を抱きしめながら登って、べらべらと話します。こうやって数年が過ぎていきました。

ハナはだんだん年をとりました。毛が薄くなって、目が弱くなって、足が遅くなりました。前は一度も獲物を取り逃がさなかったが、今はもう難しくなりました。スズメたちはいつも近所の屋根に止まって、ハナを笑うように鳴いていました。

京子も成長しました。よく勉強して、頭がいいし、髪は長く伸び綺麗になりました。クラスの子と友だちになって、一緒に勉強したり、遊んだりするようになりました。

でも、どんなに忙しくても、京子は毎日ハナに餌をやって、サラサラになるまでブラシをかけます。そして、理由は分かりませんが、毎週ハナと杉の木を見に行きます。

杉にたずねる度に、京子は地面に座って、背中を木の幹に預けて、青空を見つめます。ハナは膝に乗ってまるくなります。それから、京子が木にこの週のできごとを話します。ハナも、その木と京子に話しかけます。でも、京子には「ニャーニャー」しか聞こえません。

「おい、しゃべれるかい。」

杉は何も言わずに、ただ風に吹かれた葉っぱの音が聞こえます。

「まさか、かい。」ハナは木に登って、枝から周りを見ます。

「ね、友人たち。まだ覚えてるかい、俺たちの子供の時。天后は後何回苦しませるだろう。」

京子は笑いながら、「何をしてんの、ハナちゃん？ どうしてそんなに鳴いているの？ もう、老人になったよ、バカ猫。あまり登らないほうがいいよ。」と言いました。

京子が立ちあがりました。「帰ろうか、ハナちゃん。」

雪が降った今日は京子の20歳の誕生日でした。でも、京子は全然祝いませんでした。だって、人生で初めて、ハナちゃんはどこにも見つからなかったからです。

寒い夜なのに、京子は山奥の杉を見に行きました。

.....

「残念だけど今日は雨が降っている。初めて出会った日のことをずっと思っているんだ。とても晴れた日だった。私は空がそんなに高いなんて知らなかった。この世には大義があったら、凡人の定めたルールを守る必要がなかった。ただの仙草なのに、なぜ持っていてはいけないのかと思った。最も本質的な問題だということを知らなかった。

もちろん大義がある正直な人ならこの世界でルールに挑戦することができる。しかしルールを作った人は権限をもって罰することもある。私の誕生日、私のアイデンティティ、私の輪廻転生を受け入れるしかない。表面的なことにせよ本質的なことにせよ、選ぶことができない。私が仙人になる木になっても選べないかのようだ。死んでも生まれ変わり続ける……しかし、白ネコはもういないから、転生が終わってしまった。最後まであの人に会えたら嬉しいなあ……」

ハナがいなくなってから、京子は自分が自分じゃないかのように思った。雷が鳴り、輝いた刀、男の人、仙人、ガラガラと笑う老人は心の中にある。

彼女は杉の前に立って、杉を凝視する様子は、何かを確定することを待っている。でも、自分が何を確認しているのか、なぜこの木と一緒にいるのか、わからない。

突如、風が強くなり、老人が現れた。

京子は一歩退いて、「夢の中で貴男を見たことがあります」と言った。

「アハハ、アハハ、アハハ、夢の中、か？」と笑って答えた。

京子がまゆをひそめて、「どうして夢じゃないと分かったんですか」と聞いている。

「俺も夢であなた、今度のお名前、京子、京子を見たんだもの……アハハ……京子を見ただけでなく、京子のネコも飼っているよ」老人は意外に京子の名前を知っていて、ハナを持っている。

「ハナちゃん……ハナにまた会えるでしょうか」

老人は左手に酒壺を持って、右手を振っている、「これがあなたの最後の輪廻、すべてを忘れて断念しろ！」

京子は警戒して、老人を凝視して、自分の記憶についてどこから質問をしていいかわからない。

京子は決心して、老人に聞こうとしていた。

老人が消えたけど、京子は「じゃ・・・」と失意の表情だ。

杉は「ここは最後に会う機会だ。しかしずっと一緒に転生してきたんだから、やっぱり話さない方がいい」と思う。

京子は木の後ろに深くて暗い穴が開いたような気配がした。

「誰だ」

京子の木の後ろには何も見えない。

「どうして、この木は自分の知っていた杉なのに。この木はまだ小さくて古い木じゃないのにどうしてこんなに古く感じるのだろう。」

京子は一日中立っていた。そしてまた一日中、立ち続ける。

もう何日になるのだろうか。

ついに、杉は「なぜ、そんな馬鹿なことを・・・」と言った。

「なぜこんなことをしているのかはわからない。私は本当に誰かがそこにいるかを知りたくて」

「うん」

静かな夜だ。鳥が飛んでいて、風が吹く木の葉の音が聞こえてきた。

「・・・・・・疲れた、一緒にこの世を出る・・・・戦争、腐敗、不正直、なことなどは、ばかばかしい」

京子は杉を見つめて、「杉さんが誰なのか言わなかったから、杉さんも不正直な人だよ」

「これは違うもの」

「同じもの！」

「違うよ」

「同じだよ」

「それは別の観点からするものだよ」

「杉さんは誰だ」

老人は酒に酔ってきた、杉は何の準備もなく、自分の最期がわかったから、目を閉じた。

「人生は夢のようだけど、答えられないものは思うままに出来ないときもある。

探しても見つからない

いくら考えても

考えがふゆきとどきなこともある

なんにも考えていない

問いかけだけして答えをもとめてはいけない

いつまでも酔えばいいのだ」

杉の目がいつのまにか、閉じた。

いままで出会ったことがないような感じだった。

SAO II: 好きな V チュバーに
彼氏ができたから死んで
使えないやつに転生した？！

Ken Cheng
Jaden Joodi
Sydney Rood
Jade Sumpter

This work maintains the format chosen by the authors.

SAO II: 好きな V チュバーに彼氏ができたから死んで、使えないやつに転生した？！

「Part 1：ルブ・ライフ」

家で仕事をする。必要なものはすべてアパートまで届けてくれる。外に出るのはゴミを出す時だけ、でもいつも夜に出す。月に 1 回くらいはそうしている。僕は最後に太陽を見たのはいつだったかな。妹に聞かれるが、「寂しい」と言ってもわかってくれない。3D の世界に思い入れはない。2D の世界がコンピュータにあればいいんだ。

毎日、ラブラブちゃんの配信を見ている。「ラブラブちゃんは誰ですか」普通の人は聞くだらう。ラブラブちゃんは世界で一番かわいい V チュバー。今、チャンネルは 10 万人の登録者がいるが、僕は初日からラブラブちゃんを知っている。

ラブラブちゃんは「みんなは大切」といつも言うが、僕が一番大事なのは分かっている。ラブラブちゃんはみんなが幸せになることを望んでいる。でも、僕にだけで、ラブラブちゃんはオフラインで助けをもとめているのだ。実はラブラブちゃんはあまりお金を持っていない。だから、ラブラブちゃんのコンピュータ代やその他の物を援助したんだ。ラブラブちゃんにとって、僕は一番大切なそんざいだから、他には何もいらない。

今日はいつもと同じようなはずだった。いつものように、ラブラブちゃんの配信を見たが、その人は誰？男子？彼氏？でも、ラブラブちゃんも僕の彼女だと思っていた。別の彼氏？僕じゃない？なぜ？

なぜなぜなぜなぜー

急に、世界がぼやけ、すべてが黒くなった。

「Part 2：新生活」

あ、見られている。僕の前に人間の姿があるけど、人間の人相がない。

「あれれ、目覚めたのか？じゃあ、ちょっと待ってくれ。」

どうしてここに？何が起こった？裏切り者のラブラブちゃんは最後の記憶だ。

「あ、見つけた。ええええ、うそ、その死に方。。。面白すぎる。」

え、死んだ？僕が？どうして？

「まだ分かっていない？ショックで死んだんだ。なさけねえ。」

そうか、ショックで死んだらしいです。。。おい、こいつの口調が気に入らねえ。

「こいつは誰？」

「神だ。敬語を使ったほうがいいんだ。最低な生活をしていたから、もう一度チャンスをあたえる。魔法の異世界に転生して、勇者になれ！」

「おい待って！」

死んだ時のように、また暗くなる。。。

土の中で目が覚める。

僕の前世は無駄だったかもしれない。けど、この新しい人生を使って、新しい人になる。決めた！勇者になる！最初に景色を観察する。あ、足の隣に剣がある。あのうるさい神を許してやる。遠くに村が見える。村に行って村人に助けてもらわないと。出発前に、青い生物が一つ現れている。もしかして。。。これがスライムか。ゲームではスライムは最低な敵だから、スライムを倒すのは楽勝だ。剣を構えて突撃をするが、剣を振るう前につまずく。くそ、ここで死にたくねえ。死にたくねえ。。。

5分経過する前に、スライムに食われた。

「Part 3：本物の力」

同じ場所で目が覚めた。神様は座っていて、本を読んでいる。
ゆっくり僕を見上げる。

「かわいそう。また なさけない死に方だった！」

なさけない死に方か？あのスライムは強すぎだよ！神様を怒鳴るところだったけど、僕は神様に本当に殺されるかもしれない。怖くて、丁寧な話し方をする。

「神様、私はただの人間です。ファイターになるくんれんを受けないと、生きられませんでした。すみませんでした。」

「剣があったの？」神様はイライラしてきたようだ。次の言葉の選び方に気を付けるべきだ。

もし僕は神様を騙せるなら、転生する？「神様、もう一度チャンスをあたえていただけませんか。」

「なぜだ？おまえはもう俺の時間をむだにした。」

「神様、人間にとって本物の力は体力ではありません。たくさんのお金があることです。」

「えっ。うそだろう。どんなしょうこがある？」

「神様、もう一度転生して、お金持ちになったら、本当に勇者になります！約束します！」

「じゃあ、これがおまえの最後のチャンスだ。約束を破らないでくれよ。」

「分かりました！」神様は本当にアホだ！また暗くなる。。

親しいアパートで目が覚めた。でも、机で、手紙を見る。手紙には「これを使って、勇者になれ」と書いてあった。それに、新しい預金のパスワードも書いてあった。
「あの愚かもの！信じられない！じゃあ、もらったお金はいくらかな。。」

一週間後：

テレビのニュースによると、今、世界で、一番強い人は僕だ。一週間で、アマゾン、グーグル、などの大きな会社を買った。毎日、人々が「世界的なインフレーション」ということを話しているけど、僕には関係ない。今、僕は人生で一番幸せだ。

「Part 4：物欲」

一番幸せだと思ったが。。。実は、世界で一番嫌な人になってしまった。お金を持っているのに、なぜ幸せになれない?!もしかして、僕のせい?いえ。。。そんなわけないでしょう!僕は世界で一番強い人なんだ!ほしいものが全部買えるから!そうだ。この世界のせいだ。社会は金持ちが嫌いだから、僕は悪くない。。。よね?そして、聞き覚えがある声をふと聞いた。

「やっぱりダメな人だね。とてもがっかりだ。」

「神様?どこ?」突然、全部まっくらになって、神様がいる場所に戻った。

「なんでまたここに戻ったの?まだ生きているよ。」

「そうかもしれないけど、何のために生きているの?そんなに命が本当にほしいの?」

「いいえ、でも、お金さえあれば、幸せになれると思った。」

「じゃ、間違えたね?それに、私を騙した。お金をあげるとヒーローになると言ったが、全然ヒーローにならなかった。」

「だから、僕のせいじゃないー」

「黙れ!最後のチャンスだと言ってただろう?今は、罰しなければいけないんだ!ここにいつまでも君をとじこめる。」

そして、神様の本物の顔が現れた。人間の顔だ。

「まさか、ゴードン・ラムゼイか?!神様じゃない。悪魔だ!」

やばい、どうしよう?全然英語が話せないし、料理もできないし、地獄だ!このまま終わるはずじゃなかった。僕は新しい人生を始めて、ヒーローになるはずだった。「誰か助けてえええええええええええ。。。」

「。。。ええええええええええー はあー!」

ここはどこ？僕のコンピュータが見える。あれ？ここは僕の部屋？

「じゃ、死ななかつた？全部がただの夢か？」はっと息をついた。

コンピュータでラブラブの配信が始まる。

「あー 今日の配信か。まあ、いいか。ラブラブを見なきゃ〜」

忘れない愛

Nicole Bordeaux
Toni Enriquez
Van Hofmaister
Sean Wang

Illustration by Van Hofmaister

This work maintains the format chosen by the authors.

「桜株式会社」と呼ばれる大企業の本社で、ある若いサラリーマンはその日の残りの仕事を気軽に片付けている。男性の名は「たかし」で、彼にとって、今日はとても大切な日だ。

「いつも部長に面倒くさいことをさせられて、しょうがないなあ」と呟きながら、夜の約束を考えている。「じゃ、しょうがないなら先に失礼します」と同僚たちの皆に言って、会社を出た。

今夜は、たかしの大学時代に出会ったマーリーちゃんがやっとアメリカの大学を卒業して、日本に帰ることになった。それで、空港に近くのレストランで会うつもりだ。マーリーが帰国した三年前から、二人はずっとラブレターを交換したり、最新のケータイでテレビ電話をしたり、両方ともは深く深く恋に落ちてしまった。たかしはレストランまで歩きながら、スーツのふところをもう一度チェックした。この中には結婚を求めのためにキラキラと光っている指輪が入っている。

「今回こそ彼女の心を獲得するぞ、絶対だよ...」と自分に言った。

三十分ほどでたかしはレストランに着いた。マーリーの飛行機はまだ到着していないので、たかしはハンバーガーを一つ買っておいた。一時間待って、ようやく懐かしげな声が後ろから聞こえた。

「待たせちゃって、ごめんね。本当に久しぶりねえ、たかしくん。お元気？」

たかしは振り向いて、いつまでも美しいマーリーを見つめた。

「あー！マーリーちゃん、久しぶり！ぼくはげんき、おかげで。あの、君はおなかですいたと思ったから、もうハンバーガー買って来た。」マーリーを見たら、たかしは急に照れるようになった。マーリーはたかしのことに気がつかないでハンバーガーをもらった。

「ありがとう！ハンバーガーが大好き。。。けど、今、めっちゃ疲れていて、後で食べてもいい？」

「うん、じゃあ、今から君のホテルへ行こう？」

「うん、行こう！！」

二人は外に行ったが全然タクシーがなかった。ふと、大雨が降ってきて、ゴロゴロというかみなりが聞こえた。たかしとマーリーは一緒に中に走るようにしたが、マーリーはころんでしまって、頭を地面に打ち付けた。



「マーリー！誰か助けてくれ！救急車を呼ばなくちゃ！誰か、お願い！」

泣き始めたたかしはマーリーの隣に膝をついた。マーリーの頭をさわると、彼の手にマーリーの血がついているのが見えた。

二人に気がついた人は救急車を呼んで、救急車は急いで着いた。病院までたかしはマーリーの隣にいた。食べなかったバーガーもマーリーの手に残っていた。

～

十五時間後に、お医者様は徹夜したたかしと話した。

「お医者様！マーリーちゃんは。。。どうですか。大丈夫ですか。今、マーリーちゃんに会うことができますか。」たかしは夜通し泣いていて、心配していた。今、ちょっときぼうがあるから、しくしくと泣かないようにしている。

「マーリーさんはもう起きていますが、」

お医者様の文の終わりを聞かないで、たかしはマーリーの部屋に入った。

「マーリー！よかった、本当に心配していた！」たかしはにこにこ笑ったが、マーリーの顔は無表情だ。

「すみませんが。。。お名前は？」

たかしは急に止まった。マーリーの言ったことが信じられなかった。

「どういう意味？おれだ。たかしだよ！」

マーリーは困惑した表情でたかしを見つめた。

「た。。。かし？」

たかしの心が壊れた。

医者はたかしの後ろに現れた。

「本当にすみません。マーリーは記憶喪失です。何も覚えていません。」と説明した。

たかしは後ろ向きにつまずいた。振り向いて部屋から逃げはじめた。

「たかし君！待って！」医者が泣きながら、さげんだ。

でもたかしは医者の泣き声が聞こえなかった。外に逃げて、病院から「タタタタ」と走り続けた。まだ雨がザーザー降るから、たかしがびしょびしょになったけど、気にしなかった。

水たまりに足を踏み入れて、滑って落ちてしまった。スーツから何かが落ちた。たかしは下を見た。キラキラしたものを見た。

「あ！指輪！」と思った。

直ぐにマーリーへの愛情を思い出して、多くの記憶が思い浮かんだ。

「わ～、マーリー、ごめん！何も考えないで去ってしまったなあ！びっくりしたんだよ。許してくれ、マーリー！」と泣いた。「マーリーは何も覚えていないけど、大丈夫。ぼくはマーリーのために思い出させてあげる！早く戻らなくちゃ！」と思った。

指輪を拾おうとしたがコロコロして排水溝に落ちてしまった。

「あ～指輪が～！」と泣きさげんだ。

排水溝を見ている間に、たかしの目が涙でいっぱいになった。体がすぐに弱くなって、息苦しくなった。

「これは現実にはありえない」とたかしはつぶやいた。手でコンクリートを叩きつけた。

「くそ！」

「なんで。なんで、こんなことが起こっているのか？」たかしはしくしく泣いた。たかしは頭を横に振って、目を手で擦りながら、「いやだ。諦めないだ。」と叫んだ。

「マーリーと一緒に未来を諦めない！」と言った、「絶対に指輪を見つけられる！」

たかしは立って、マンホールの蓋にスタスタと歩いていた。彼はかがんで、強い力で蓋を引き上げた。真っ黒い穴を見て、息を吐いた。

「マーリーのために。。。」と言って、真っ黒い穴に入った。

たかしは下水道の下まで何時間かかるか分からなかったけど、マーリーのところへすぐに戻るために、たかしはできるだけ速く動いた。ようやく梯子の下にたどり着いたが、まだ真っ暗だから何も見られなかった。たかしは携帯を出して、フラッシュをつけた。下水道のトンネルが明るくなって、たかしはもう一度、キラキラしたものを見た。

「あ！指輪だ！」

たかしは見つけた指輪にむかって歩いて、拾うために手を出したけど、急に大きいネズミが現れた。ネズミは口で指輪を拾って、速く逃げていった。

「おい！その指輪はお前のなんかじゃない！」と叫んだ。たかしはネズミを追い始めた。「やめろ！ばかネズミ、その指輪は愛している女の子のためのものだ！」

ネズミは広い部屋に入って、たかしはついて行ったけど、急に止まった。部屋の中で、ネズミの群れに囲まれた玉座を見た。玉座の上に彼の指輪が載っていた。ジロジロ見た。

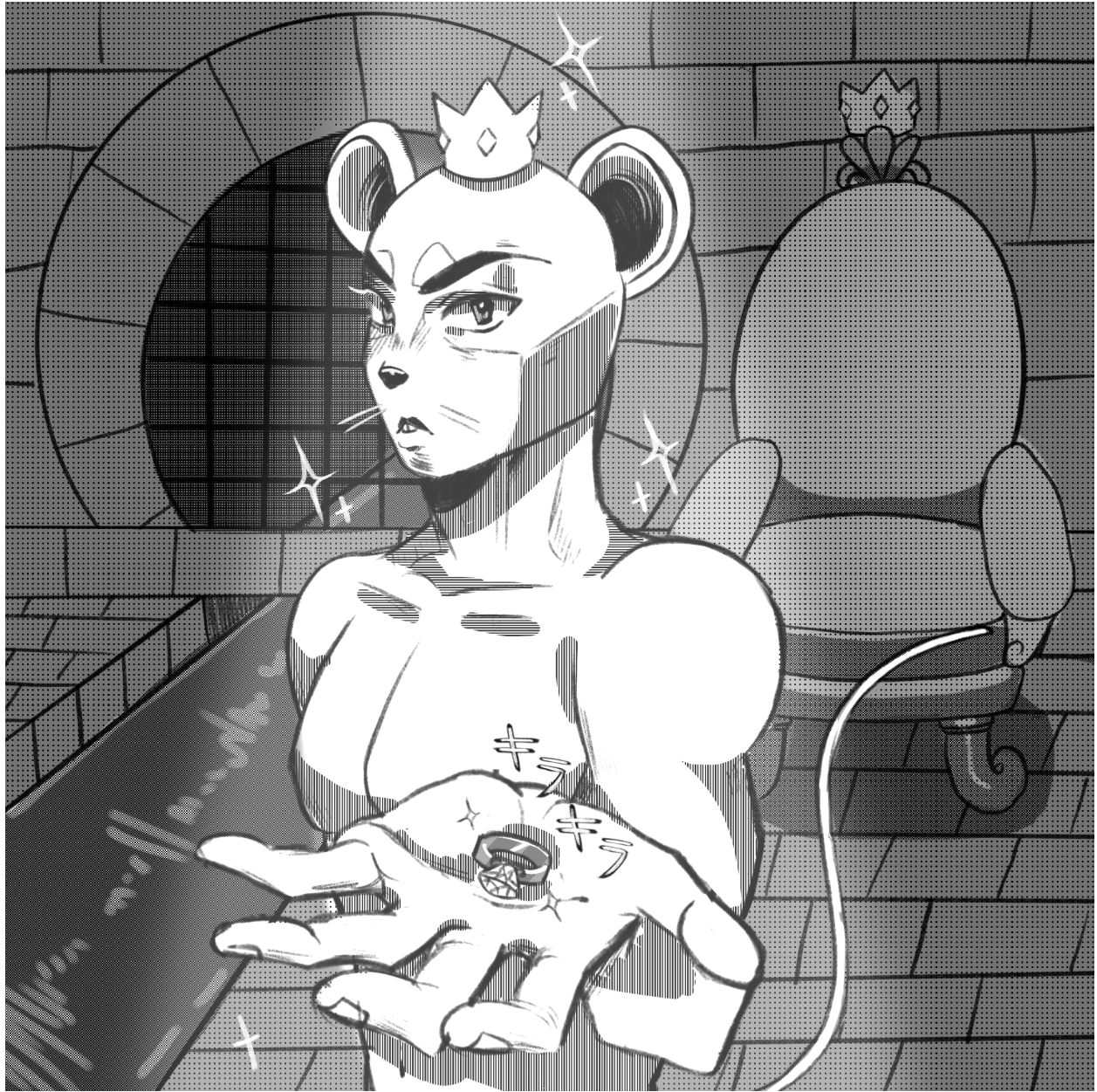
「本当に現実じゃないかな。。。」

「現実でござる」

たかしは悲鳴をあげた。たかしが振り返ると、後ろに指輪を盗んだネズミがいた。でも、ネズミの頭の上に小さい王冠があった。

「たかしくんの愛は清いでござる。このネズミの王はたかしを手伝ってあげる。」

「ネズミの王?!」



「はい。あなたの指輪を祝福した。あなたの愛する人のもとに持って行って。そうすれば、すべての不幸は清められるでしょう。」と言った。

「あ、ありがとうございます？」

たかしは目を閉じて、また目を開いた時、急に病院の中のマーリーの部屋の外にいた。

「え？どうやってここにいるんだ。」と言って、手を見ると、指輪を持っているのが見えた。「いや。そんなことは大事じゃない。」大きい息を吸って、マーリーの部屋に入った。

たかしはベッドに向かって歩いていた、「マーリー、たかしだ」と言った。

マーリーはすやすやと寝ていて、たかしは彼女の手をそっと握り、指輪を手の中に入れた。たかしはもう一度目を閉じた。

「さっきは逃げてごめんね。今何も覚えていなくても、大丈夫だよ。ぼくは決してあなたを愛することを止めないし、あなたが幸せである限り、私も幸せになれる。可能な限り多くの時間をあなたと一緒に過ごすことができたらと思うよ。」

急に、マーリーが手を握り締めるのを感じた。すぐ目を開いて、シクシクと泣き始めた。

マーリーはニコニコしていて、たかしの顔に手を近づけた。

「大丈夫よ。泣かないで、たかしくん。」

禁断のお茶

Corinne Morris

Kayla Sasser

Mika Watanabe

「ケイラ、早く！電車に乗り遅れるよー」

「今行く〜！」

「走って！」 たたたた

***手荷物をドアに挟まれないようご注意ください。

ドアが閉まります、ご注意ください***

「へとへと。。。ヘンリーなぜ。。待たなかった？」

「待ちたくなかった。。。疲れたよ。私たちはもう14時間飛んでいるから、祖父母の家に行きたいだけ。。」ヘンリーは座りながら言いました。

「ハー、わかってるけど、私にまだ持ってる」ケイラがヘンリーの隣に座りながら言いました。

「じゃあ、そこに着くまでどれくらいなの？」とケイラは聞きました。

「30分だけ！」ヘンリーが答えました。

「うれしい？」

「当たり前、日本に来るのはこれが初めてで、ようやく祖父母に会うことができる。」

「うん、私も。若い時にママとパパに私たちを連れて行ってほしかった。」とケイラが言いました。

「パパとママは祖父母が好きじゃないのを知ってるよね？」とヘンリーが言いました。

「でも、なぜ？なぜパパとママは、全然このことを話さなかったの？」

「知らないよー」ヘンリーは肩をすくめながら言いました。

30分後

「これ？」とケイラは聞きました。

「そうだと思う。。。じゃ、入ってみよう」とヘンリーは言いました。

ケイラはヘンリーの腕をつかんで、「緊張してる、たぶん、ママとパパがおばあちゃんとおじいちゃんについて話さない理由がある。」と言いました。

「ケイラ。。やめて。私たちはだいじょうぶだよ。」とヘンリーが言いました。

突然、家のドアが開きます。小さなおばあさんが出てきて言いました。「ケイラとヘンリーでしょうか？」おばあちゃんにはやにやと笑いながら、聞きました。

ケイラとヘンリーは顔を見合わせます。「あ、はい。」とケイラとヘンリーは答えました。

「早く、来て！」とおばあちゃんは言いました。

。。。

おじいちゃんは「こんばんは！」と言いました。「ついに孫に会えてとてもうれしい。」

おばあちゃんは「疲れているに違いないわね。お部屋をお見せしましょう」と言いました。

「はい」とヘンリーは答えました。

「これはお部屋です」とおばあさんは言いました。

「あ、ありがとうございます。」とヘンリーは言いました。

「あ、おばあちゃん。。」とケイラが言うと

「うん、何？」とおばあちゃんは聞きました。

「あの、私たちはたくさんお茶を飲んでいるんだけど、家の中に、お茶がありますか？」とケイラは聞きました。

「うん、もちろん! パントリーにあるわよ。」とおばあちゃんが言うと

「あ、はい。ありがとうございます。」とケイラが言いました。

「でも、夜にはお茶を飲まないでください。」おばあちゃんは警告をしました。

「どうして？」ヘンリーは聞きました。

「絶対に飲んじゃだめですよ。じゃ、おやすみなさい。」

とおばあさんは言いました。

「おやすみ」とケイラとヘンリーが言った後、「それは、ちょっと変だね」とヘンリーは言いました。

「うん、でも、多分、年をとっているせいだから」とケイラは答えました。

「ベッドの準備をしましょう」とヘンリーは言いました。

20分後

「ケイラちゃん、私は喉が渴いている」ヘンリーは横になり始めたときに言いました。

「お茶が飲みたいよ！」

「おばあちゃんは夜にお茶を飲まないでと言った」とケイラは答えました。

「悪いことは何も起こらないよ」とヘンリーは言いました。

「じゃ、一人で行ってよ」とケイラは言ったけど、

「いいえー、一緒に行きましょう！」とヘンリーは言いました。「お願いー！」とヘンリーがたのみました。

「*ためいき* じゃ、行くよ。」とケイラは答えました。

ちびちび飲みながら「このお茶はほんとに美味しいね」とヘンリーは言いました。

「うん、でも、おばあちゃんが言ったことを少し心配してるよ」とケイラは言いました。

「ケイラちゃん、何ー？」と言いだした時

ガァァーダンダン

「おばあちゃん?。。。。。。 おじいちゃん?。。。」ヘンリーは呼び出されました。

ケイラはおとなしく「こ　これは。。何？」と聞きました。

「これは、たぶん、風の音だよ」とヘンリーが答えました。

「違うよ！」とケイラは言ったけど、ヘンリーは「忘れて、寝ましょう」と言いました。

新しい場所だからか、不快なベッドだからかもしれませんが、子供たちは寝れませんでした。

昨日の変な音はケイラとヘンリーをそわそわさせました。

「ケイラ、あの音は、何だった？」とヘンリーはこわごわ聞きました。

「わっかんないけど。。外から聞こえたと思う」とケイラは答えました。

静かに、5分が経ちました。

ケイラは突然立ちあがりました。「あの音が何なのかわからなくちゃ。何かがおかしい。」と言って走って行きました。

「ケイラ、待って〜！」

子どもたちは驚張りみたいな床を気をつけながら、静かに動きました。

ギシッ〜

「シー！ヘンリー！」とケイラが囁きました。

家を抜け出して、小屋に向かってそっと歩きました。

夜の空気は普通ではありませんでした。

重かったです。

夏ですが、小屋の近くを歩けば、歩くほど空気は冷たくなりました。

「あ〜！頭が痛い。。。」ケイラは文句を言いました。

「怖いよ！ケイラ、やめよう！」

シーン

小屋は暗く、静かでした。

鉄のような変な匂いがして、月明かりの中に、下の階があるのが見えました。

「ヘンリー。ここで待って。」とケイラは厳粛に言いました。

「うん。」ヘンリーはうなずきました。

階段を降りました。

ぎいぎい〜 グチャ！

地下室は真っ暗で、ケイラは何かを踏みました。

ぐにゃぐにゃなもので、その匂いは強すぎて、ケイラは気分が悪くなっていきました。

あそこ、あれは何？袋かな？

「何だ。。。キャー！」

ケイラは階段を素早く駆け上がりました。

「ヘンリー、走ろう！」

しかし、子どもたちは走りませんでした。

家の玄関に、人間がいるのが見えました。

「子供たち、どうしたの？」おじいちゃんはくすくす笑いました。

「ベッドに戻ってください。ここは、夜は。。。安全ではないよ。。。」

「は、はい！」子どもたちは答えました。

次の日 ヘンリーとケイラはベッドから起きました。

「昨夜は本当だった？」とケイラが言いました。

「知らない。夢だったかな？」とヘンリーが言いました。突然ヘンリーの胃が痛くなり始めました。

「ヘンリー、大丈夫？」とケイラが言いました。

「ううん。胃がきりきりしている。」とヘンリーが答えて、お腹を抱えました。

「暖かいお茶が効くかもしれない。」とケイラが言って、二人はキッチンに行きました。キッチンで祖父母は朝ごはんを作っておました。

おばあさんは二人を見て、「よく寝た？」とたずねました。

「ちょっと。。。実は変な夢を見たし、今朝僕の胃が痛くなった。」とヘンリーが答えました。

「こまったね。昨夜何か食べた？」とおじいさんが言いました。

「ううん、真夜中にお茶を飲んだだけ。」とヘンリーが答えました。

「あ、宵越しのお茶を飲むのはよくない。体に悪いから。」とおばあさんが言いました。

「お茶を飲んだから、変な夢を見たかもしれない。」とおじいさんが言って、ヘンリーにヤクルトをあげました。

朝ごはんを食べた後、ヘンリーとケイラは上に荷物をまとめに行きました。

「昨夜は全部夢だったに違いない。お茶を飲んだから、変な夢を見た。」とケイラが叫びました。

「そうだね。私たちの祖父母は絶対に人を殺さないよね。」とヘンリーが言いました。

午後4時に、ケイラとヘンリーは荷物をまとめて、タクシーに乗り込みました。

「またすぐ日本に来なさい。」とおばあさんが言って、ケイラとヘンリーはタクシーに乗りました。ヘンリーはタクシーの中で、後ろを見たら、おばあさんとおじいさんがまだいて、二人の目が真っ赤でした。

「ケイラ見て！」とヘンリーが叫びました。

ヘンリーが後ろを見たら、祖父母がいませんでした。

「どうしたの？」とケイラが言いました。

「何でもない。まちがった。ごめん。」とヘンリーが言いました。

ヘンリーはすべてが本当にあったことかどうか考えていました。

終わり

最後の配達

Oh Haeh Lyn
Ashley Sun
Maya Swain
Steven Vo

普通の朝だった。朝起きて、シャワーを浴びて、朝ご飯を食べて、妻に「いってきます」と言って、勤めているウェアハウスに行った。そう、昨日と同じ、一昨日と同じ、先一昨日と同じルーティンだ。この町に来た日から死ぬ日までのルーティンのはずだ。そんなこと考えるとすぐ落ち込むけど。

「あ、佐藤さん、おはよ！」

ウェアハウスの店長と佐藤が知らない人と立っている。

「おはようございます、店長。今日はいい天気ですね。」

「そう、そう。ところで、奥さん、どう？」

「あ、美味しい朝ご飯を作ってくれました。」

店長の中村は馴れ馴れしい人だ。

中村が隣の人の方を向いた。

「佐藤の奥さん、すごく美人なんだ。それに、優しいし、料理もできる。俺も、そのようないい奥さんほしいなあ。」

「へえ、そうですか。」

中村の隣の人が佐藤の方を向いた。

「田中と申します！今日からここで働いています。よろしくお願いします！」

「ああ、新人か。よろしくお願いします。」

「佐藤。」中村が呼んだ。

「はい。」

「今日は田中の一日目だから、彼を連れて行って。えっと、仕事の仕方を習うため。」

「わかりました。田中、こっちに来て。」

二人はウェアハウスのパッケージ・ルームに向かって歩いた。

「ここはパッケージ・ルームだ。お客さんの小包がある。小包を分けた後にトラックに運んで、お客さんの家に届ける。」

「はい、はい。あ、何それ！！」と言いながら大きい箱を指した。箱を開け始めた。

「絶対にいい物がある！」

「おい、手を出すな！お客さんに失礼だ！」

「チッ、ちゃんと閉めるつもりだったのに。」

佐藤は小包を分けて、トラックに運んだ。田中は何も言わずに見ていた。

「おい、田中、小包を届けるからトラックに入って。」と言いながらエンジンをかけた。

「はいいい。」

トラックに入ってから田中にギャーギャー言われた。さっき、ちゃんと静かにしたのに。数分後、最初のお客さんの家は近くなった。

急に「ねえ」と言われて、佐藤は田中の方を向いて、「うるさい！」と叫んだ。

道を見ていなかった。信号機が赤になった。ある高校生がトラックにぶつかった。

「ガシャン！！！」

「なんだ！」

「佐藤さん、や、やばい。誰かをこ、殺。。。」

トラックの前に、動けない体があって、血だまりがあった。

二

二人はパニックになって長い間何も言わなかった。田中は佐藤に「逃げよう」と言ったが、佐藤は道路の上の体を確認しに行った。

佐藤は体の近くに言ったが、息が止まって血をたくさん流してもう死んだようだった。

佐藤は自分が人を殺したことが信じられなかった。

動かない体を見ながらしくしく泣いた。

彼は制服を着ていたので、多分高校生だと思った。

佐藤は救急車を呼ぼうとしていたが、田中は佐藤の携帯電話を取った。

「佐藤さん、何してるんですか。電話してはダメですよ！」

「何言ってるの。今病院に行ったら大丈夫かもしれないよ。」

「バカを言わないでください。今電話したら佐藤さんは刑務所に行くことになります。逃げるのがいいと思いますよ。」

「でも、この学生を生きさなければならぬ。」

田中は周りに誰かがいるかを見て、佐藤をトラックまで連れて行って逃げた。

三

15分後に、動かない体は急に動き始めた。周りに人がいなくて、誰も見えなかった。その体は立ちあがって、田中と佐藤のいる道を歩き始めた。でも、歩いていると、高校生の足元に血がついている。高校生は「痛い。。」と言った。ウェアハウスに佐藤と田中がもどった。

「どうしよう田中？私達はこの高校生を道に残してはいけなかったんじゃないか。僕が戻ればよかったのか。」

「私は佐藤さんと中村さんのイメージを守りたかったんです。すみません。」

佐藤と田中が話していると、ウェアハウスの前に影があらわれた。

「ドン。。ドン。。」

「あれ。さっき音が聞こえましたか。」

「うん、ウェアハウスの扉から。」

「私が行ってみてくる」

「警察。。来ないで」と思いながら、扉に行った。でも、扉を開けたとき、意外にも中村店長がいた。

「こんにちは店長、どうしましたか。」

四

「オフィスに来て」と中村は佐藤と田中に言った。

中村店長の表情はとても真剣だった。佐藤と田中は自分たちが困っていることを知っていた。彼らが中村のオフィスに足を踏み入れたとき、佐藤は気絶しそうになった。血まみれの高校生がオフィスに座っていた。

「私の息子に会ったでしょう?」と中村は言った。

「え——?」佐藤が叫んだ。田中の顔が真っ白になった。

「あなたが運転していた道に息子を迎えに行きました。トラックを見て、彼をひいたのは私の従業員であることに気がつきました。私はそれがあなたにちがいないとわかりました。」と中村は言った。

佐藤はひざまずいて泣き始めた。

「ごめんなさい!ごめんなさい!」彼は泣いた。

「立ち上がれ」中村は命じた。

「佐藤さんは長く働いてくれていて恩義があるので、警察にはつれて行きません。」中村は言った。佐藤は安堵のため息をついた。

「しかし」と中村は続けた。「これから、きみたち二人は、私が面倒をみてやる。ただ、今後20年間の給与は通常の半分にする。さあ、今、私の息子を病院に連れて行きなさい」

佐藤と田中は給与が20年間半分になるとはショックだったが、ほっとして、うなずいた。

二人の男は、血まみれの少年を無言で病院に連れて行き、次の20年間の困難について考えた。

猫神と砂の犬くん:
ブレイド・オブ・グローリー

Saejah Barrack
Christopher De Leeuw
Christopher Galvez
Nixa Starr

昔々、ある砂の町に猫の神様がいました。この街は昔のエジプトにある場所でした。猫の神様は人に愛され、とっても強い神でした。猫らしくて、他の神々に全然興味を持ちませんでした。猫の神様はなん百年もずっと一人で生きて、「つまらなくなってきた」と思っていました。その瞬間、休んでいた神社の奥に置いておいた鏡から光が出てきました。突然、犬が目の前に現れました！

ヒンはまた今日一日中その家の前に立っていました。きっと今日ご主人様が開けてくれます。ヒンのことを忘れるなんてありえない。ぼーっとしてたらもう太陽はしずんでいました。「今日はもう森の中で食べ物を見つけなくちゃ」と思いながら森に向かって歩いていました。森のあそこにピカピカと輝いているものを見つけました。「これはなんだろう。。。鏡？。。。アアア！」。

猫の神様は驚き、すぐに姿を消しました。「この生き物は敵なのかもしれない」と思いながら犬を見ていました。「この生き物、犬にそっくりだけどちょっとかたちがちがうね」。ヒンはご主人様がもう家に帰らなかった日から食べ物があまり見つけれなくて、夜は寒くてずいぶん痩せてきました。肋骨も足や腕の骨も見えるくらいに痩せてしまいました。猫の神様はその犬が情けないと思って肉まんを手に出して、姿を現しました。

「これ、ワンちゃん！肉まんを食べるかい？」

急に呼びかけられてヒンはびっくりして飛び上がりました。

よく見てみると古代エジプトの猫の神様が肉まんを差し出して、優しく微笑みかけていました。ヒンはエジプトの犬なので、肉まんなど見たことがありません。でも、お腹が空いているのでそうっと近寄って、肉まんを咥え、猫の神様にお辞儀をしました。エジプトでは、宿無し犬は何十万匹といます。何でも見つけれられるものを食べなければなりません。

猫の神様はエジプトの宿なし犬たちに何かしてやりたいと思いました。魔法を使って、人間が宿なし犬を猫と同様可愛がるようにおまじないをしました。猫の神様はエジプト語でバステットと言ひ、お城で大変良い暮らしをしています。猫の神様はヒンに新しい名前を与えて、立派な首輪をあげました。

「今日から君はヒンではなくて、アヌビスと言う名前にしてあげよう。お城を守る大切な役割をして、そのご褒美にたくさん美味しいものをたべさせてあげよう。君も他のワンちゃんも人間からも愛されるようになる。」

アヌビスは大変喜び、バステットと一緒にお城に向かいました。お城の門をくぐった瞬間、大変な事が起きました。。。

城の端に歳をとった猫が現れました。

「俺がミニヤモトむさし、俺が猫の神を殺しに来た。俺の時代には強い敵がいなかったから、魔法の鏡に「世界中の一番強い猫を見せてくれえ」と聞いた。あなたたちが鏡から出てきた。俺とたたかえ」

アヌビスとバステットはびっくりしました。バステットは戦ったことがありませんから、すごく緊張していました。むさしは短くて、あぶない刀を使いますから、素手で戦えません。アヌビスはすごく強いけど、むさしのオーラは強すぎますから、神様さえ怖くなります。むさしは負けたことがない猫ですから、体だけでなく心と頭も強いです。

バステットは怖いのに、「私の友達を守らなきゃいけない」と考えました。バステットはアヌビスのために突撃しましたが、むさしの刀は、はやすぎます。むさしはバステットをじろじろ見ながら、「武器が持ってない敵はわかりやすすぎる」と言っていました。アヌビスはもう緊張しすぎてバステットを守れません。でも、アヌビスは「どのように友達を手伝ってあげられるだろう」と考えました。急にアヌビスの胸から光が出ました。「これ何?!」と考えているうちに、胸からキラキラしている刀が出ていまし

た。その刀の中にアヌビスの魔法があって、持っている動物は神のような強さがあるはずです。

アヌビスは「バステット」と呼んで、「この刀を使ったら、その猫を倒せるはずだ！」と言いました。バステットは刀を手に取りました。むさしはバステットを切りました。バステットの目がキラキラし出しました。むさしは前より早く突撃したので、バステットはむさしに切られました。バステットの刀が早すぎたから、むさしはきずに気が付きませんでした。むさしは「アハハ」と笑いながら、額から血がゆっくり出ているを見ました。むさしは恥ずかしくなったから、すごく怒り出しました。「あなたたちをぶっ殺してやる！」と叫びました。

これはたたかいの始まり。

額から血を出しながら、むさしは刀を上げて、走り出します。今、アヌビスの強さが増したので、ぜんぜん疲れませんが、ドキドキが止まりませんでした。やっぱり、むさしは刀を上手に使う才能があったので、一度だけ むさしは刀でアヌビスを切りつけました。耳の近くを切られたので、あまり聞こえませんでした。少しずつ、アヌビスは地に倒れました。「アヌビス！！」バステットは叫びながら、アヌビスに向かって走り出しましたが、むさし刀を上げていました。突撃したけど、機会を逃しました。

アヌビスは静かになりました、バステットはなにも考えられませんでした。立ち止まった時に、突撃していきました。急に、二人のたたかいになりました。まばたきせずに、バステットはむさしの首に刀を刺しました。ボタボタと血がこぼしながら、むさしは最後に息をしました。結局、むさしは死にました。でも、アヌビスはもっと静かでした。走りながら、バステットは泣き叫びました。血だまりがありました、息をしていませんでした。大きい声で「アヌビス！起きなきゃー、アヌビスがなくならなければ、私の生活は酷いになるはずよ！一緒に生き続けなきゃ！」と言いました。その瞬間、魔法の刀があったことを思い出しました。バステットはアヌビスの近くの魔法の刀を壊しました。刀の中には水のような液があって、魔法の液を触ったら、死んでいる人は生きかえ

ると言われています。アヌビスは魔法の液を触って、ゆっくり目をあけました。「アヌビス！これからずっとそばにいるよ」とバステットが言って、小さい声で「俺も」とバステットが答えました。